題名「わたしと介護」

氏名　中田　彩楓

私は、夏休みに介護・福祉のおしごと親子体験バスツアーに参加しました。参加した理由は、介護のお仕事につきたいからです。これから、おじいちゃん、おばあちゃんが多くなってきて、介護のお仕事につく人が少なくなっているので、私がやりたいと思いました。私のお父さんとお母さんも、介護のお仕事をしています。お父さんとお母さんのお仕事が楽しそうに思えたのもやりたい理由です。

親子体験バスツアーでは、おじいちゃん、おばあちゃんたちがすごしやすいように、建てられた場所に行きました。ここで職員の人から、ふくしとは「ふ」だんの「く」らし「し」あわせにということと介護者さんは、かげになり利用者さんを支える人と教えてくれました。私はそれを知って、福祉には、そんな意味があったんだなと知りました。次に、おじいちゃん、おばあちゃんの、ふだんの生活でどんなことに困っているのかをぎじ

体験しました。体験してみたら、すごく大変でした。ひざが曲がりにくいようにかたいひざあてをしました。そのひざあてにベルトがついていて、こしが曲がったかたちになり、両手と両足に重りをつけました。スリッパは片方が重かったです。目には、しかいがせまくなるゴーグルをつけました。そして、つえを持ち、お父さんの手を借りて、階段を登りました。すごく歩きづらく、こしも痛かったです。周りを見る時に首までふらないと見られず、階段を登っている間、つまずきそうになり、お父さんの手を借りないとダメでした。

この体験をして、介護はおじいちゃん、おばあちゃんにとって大切だと思いました。この体験をして、介護のお仕事をしたいという気持ちが高まりました。

題名「介護の大変さを学ぶ」

氏名　広田　航

夏休み中、僕の祖父は食道がんの大手術をしました。祖父は心臓の持病もあり、また肺の機能も弱っており、長時間の手術に体が耐えられるかとても不安で心配でした。母からは、とてもリスクのある手術と聞いてたので、驚きとショックで僕の心はいたたまれない気持ちでいっぱいでした。

僕の祖父は、実家に遊びに行くと、いつも優しく出迎えて話しかけてくれました。中でも畑で育てている野菜を見せてくれたり、植物の成長について色々教えてくれました。収穫も一緒にしました。祖父の作る野菜は全て愛情がこもっていて、どれもみんなおいしいです。

八月初めに大手術を何とか無事に終えました。手術直後の祖父は、体の中には色々な管が入っていて、痛々しい姿でした。それを見て自然と涙が溢れてきました。同時に、僕は心の中で必死に「頑張れ」と応援していました。一日一日

の入院生活は動けずとても大変で、母がひんぱんに付き添い看病しました。僕も祖父の痛みを和らげるために、背中をさすったり顔や体の汗をふいたり、動けない足をもんだり自分のできることをしました。

今年の夏休みは、介護の大変さを知りました。人の手助けが必要な事や、人が困っている時はそっと手を差し伸べる事の大切さを学びました。そして、人は常に支え合って生きていることを実感しました。

八月終わりには、少しずつ回復しており歩けるようになりました。水も飲めるようになりました。これからも、祖父は病気と闘って生きていきます。家族の一員として、母の負担を少しでも減らし、祖父を手助けしていこうと思います。これからも、自分の出来る事を見つけ家族や社会に貢献していきたいと思うと同時に、少子高齢化の今、人と人とのつながりを大切にし、積極的に協力したいです。介護の大変さや生命の大切さを学びました。

題名「私の家族と介護」

氏名　若松　未優

私のおばあちゃんは、私のおじいちゃんを十年以上介護していました。おじいちゃんはずっとねたきりでした。おばあちゃんは、夜中もたんをとったり、顔をふいたり、熱が出たときは、何度もアイスノンをとりかえたり、とても一生けんめい、おじいちゃんのお世話をしていました。でも、おじいちゃんのお世話をしていたのは、おばあちゃんだけではありませんでした。おじいちゃんの娘である、私のお母さんや、お母さんのお兄さんなど、家族みんなで助け合っていました。また、ほう問してくれる、かんごしさんやお医者さん、お風呂の介助をしてくれる、介護士さんや、ヘルパーさんなど、たくさんの人が関わっていました。これは聞いたところ、介護保険というものをつかっているということでした。介護保険とは、介護が必要になった高齢者を社会全体で支えるしくみだそうです。そのおかげで、家族だけで介護をしなければいけないのではなく、いろんな助けを

得られるということでした。

もう、おじいちゃんは、亡くなってしまいました。おじいちゃんの介護をしていたおばあちゃんは、おじいちゃんを死なせたくない、つらい思いを出来るだけさせたくない思いでいました。そんなおばあちゃんを私はすごいと思いました。これから先、おじいちゃん以外の家族が介護を必要とするときが来るかもしれません。そのときは、私も参加して、みんなで協力し、助け合い、本人も家族も周りもみんながよかったなと思えるようにしたいです。

題名「私のおじいちゃんへの気持ち」

氏名　吉野　結菜

私には、耳が不自由で足こしも弱く、物忘れがひどいおじいちゃんがいます。九十歳くらいなので仕方ないとも思うけど、世話をしている人の事を考えると、

「めいわくだな〜！」

と思います。いくらがんばって言ってもすぐに忘れもうごめんだって思います。私が小さいころはケートラで山の公園に連れていってくれたりジュースを買ってくれたり大好きなおじいちゃんでした。なのに今は車に乗って犬の散歩に一日に五十回ほど行ってなどと大変なことをやったりして車を乗るのを禁止されました。いろいろ禁止されていくおじいちゃんをみると少しつらいです。でも、すご〜くうざいと思うことがあります。おじいちゃんがいるとみんながピリピリします。おじいちゃんがいるとまわりがうるさくなります。そんなおじいちゃんを私は正直

「大きらい！」

になりかけようとしていました。
その気持ちをかえてくれたのは
「介護」
です。私はバスツアーに参加して認知症やお年よりの体の変化を勉強しました。そして、大切なことは
「その人の気持ちを分かろうとすること」
だと分かりました。
それを知っても、おじいちゃんの意地っぱりでえらそうなすがたには正直むっとしますが、おじいちゃんへの気持ちや態度をすこしずつかえていくことができています。
私にとって介護は気持ちを変えてくれた、かけがえのないものです。いつか、まわりの人も介護で人生を変えてもらう日がくるかもしれません。そんな人が、たくさんいるとすごくうれしいです。